

94unofficial fanbook
presented by FourLeavesClover

ロナルド×ドラルケ

年下の ボク1コ



94unofficial fanbook
presented by FourLeavesClover

ロナルド×ドラルク♀

年下の オトコ 1コ





退治早く終わって
帰れたわ

かへり

えっ
ロナルド君
今日泊り仕事じゃ
無かったつけ

そうだったん
だけど

頑張って巻きて
終わらせて

びっくり
させようと
思っ

あつゴメン
もしかしたら
予定入れてたり…？

ちがうヌン

明日帰ってきたら
連休の予定
だったヌン？

だからドラルク様は
張り切って用務を
してたヌン

☆
明日はスタミナ料理で
精をつけよう
色々買いだめでたヌン

えええええ
お返しは
お返しは
お返しは

お返しは
お返しは
お返しは





続き……
ベッド行こっか

……
うん……っ







三十年連れ添った夫に溺愛されています

nana

その様子に、巷ではついにドラルクがチャームの能力に目覚めたのでは、などという噂まで流れる始末だった。もちろんそんなことはないのだが。

さて、そんな二人は今、ラブなホテルに来ていた。デートではなく、不可抗力の結果である。

ドラルクの夫、ロナルドには数々の通り名がある。ロナ戦のロナルド。イケオジのロナルド。敏腕退治人のロナルド。

だがここ二十数年、ドラルクと一緒にいるときの彼はもっぱらこう呼ばれていた。

「愛妻家のロナルド」と。

ドラルクが、押しかけではなく正式なロナルドの妻となつてから、もうかなりの年月が経つ。

ともに暮らして三十余年。これほどの時間が過ぎれば、いかげん愛に溺りが見える夫婦も少なくないが、彼らに限つてはその心配は皆無だった。それどころか、二人の親密度は今も年々増しているように見える。

事務所を訪れば、彼らの日常を垣間見ることができだろう。時にはその濃密な雰囲気にあてられた依頼人が、「お邪魔しました」と即座に帰ってしまうほどに、二人の仲は未だ良好なのだった。

こんな夫にドラルクは「妻に公然と色目を使うような男に育てたつもりはない」などと時折ぼやいているのだが、ロナルド本人はどこ吹く風で、ドラルクへの愛を隠そうともしない。

ことの発端は昨夜未明、シンヨコに突如湧いた大量の吸血アブラムシ。

ギルド総出で駆除に走ること数時間。気づけば夜明けはすぐそこで、事務所に帰り着くまでに朝日が昇りきつてしまふことは誰の目にも明白だった。

「これは避難するしかねえか……」

「避難って、もしかして」

「ああ。こんな時間に飛び込めるとこなんて決まってるだろう」

そうして慌てて駆け込んだのが、二十四時間ウエルカムなこのホテルだったというわけだ。

二人に同行していたジョンは「静かな部屋で寝るヌ」と言つて、一足先に帰つていった。

「ちよつと待つて。静かな部屋ってどういう意味かな、ジョンさん？」

ドラルクが質問するも、氣を遣える使い魔はあえて答えず、生ぬるい笑みを返した後ロナルドに耳打ちした。

「ヌヌヌヌン、ヌヌヌヌン、ヌヌヌヌン」

「ああ、わかった、ちゃんと自制するぜ。それと帰りに美味いアイス買って帰るからな！」

「ヌン！」

「ちょっとコラ、人の話を聞きなさい、二人とも！」

ドラルクの小言をよそに、ロナルドとジョンは笑顔で握手を交わしている。

一方、そんな様子を眺めつつ、改めて自らの心の底を覗き込んだドラルクは、そこにフツフツと湧くある種の高揚感を認めざるをえなかった。

なにせ二人きりでラブホにおこりなんて、実に数年ぶりのこと。加えてここ最近は忙しく、色事とは縁遠い日々が続いていた。満たされない欲求は、気づけばとうに溢れていたのだとわかる。

ロナルドは殊勝にも自制するなどと言っているが、優しき使い魔の気遣いを無下にしないためにも、ここは存分に楽しむのが得策だろう。

となれば、あとはいかにしてこの愛妻家たる男の防壁を崩し、羽目を外させるかということに尽きる。

年齢を重ねてからのロナルドは、こと情事に關しては若いころのような無茶をしなくなっていた。優しく丁寧に扱われることは嬉しくもあるが、一方で時にはもう少し刺激が欲しいと思うこともある。

(何かいい起爆剤はないものか……)

思案するドラルクの脳裏に、ある記憶が蘇った。

以前ロナルドのパソコンを覗き見てしまったときに偶然発見したそれ。

(よし、これならさすがのロナルド様も理性を失うに違いない)

ロナルドを、自分好みのジェントルな男に育て上げたのはほかでもないドラルク自身なのだが、たまにはそれを崩すのもまた一興。

「ん？ どうした、考え事か？」

「ああ、いや、なんでもないよ」

不埒な思惑を気取られたかと内心慌てるドラルクの肩を、ロナルドは包み込むように抱いた。

「大丈夫、無茶はしねえよ」

(それはどうかな)

心のうちをうっかり声に出さないよう気を付けながら、ドラルクは艶やかに微笑んだ。

「期待してるよ、ロナルド君」

「えっ？ 風呂、別々に入るのか？」

「うん。君、先に入ってきていいよ」

「こやか、言うドラルクに、ロナルドは涙目になった。「エー、なんですよ！ 俺、そんなに信用されてないのかよ！ 風呂場でいきなり襲ったりしないから！」

「いいから入ってきなさい。汗臭くて死ぬわ」

苦し紛れにそう返すと、ロナルドは「うう、そっち……？」と呟いて大人しくバスルームに向かった。

よし、これで少しは準備の時間が取れるというものだ。

ドラルクは部屋の隅に設置されたショーケースに向かう。そこにはこういつたホテルに付き物の様々なアダルトグッズが自販機形式で売られていた。

その中から、目的の物を選び購入する。

「フフ、若造め、愛妻家もいいが、たまには目にももの見せてくれるわ。カワイイ私に存分に翻弄されるがいい」

一方その頃ロナルドは、そんなドラルクの思惑には露ほども気づかず、愛しい妻に無体を働かないよう必死に理性を動員させていた。

「さあ、ロナルド君お待たせ！ 可愛い私が出来たぞ！」

シャワーを浴び、バスローブを纏ったドラルクがベッドに行くと、先に寝転がっていたロナルドはパツと身を起こし、両手を広げてドラルクを抱きしめた。

「お待たせされたぜ！ やった、俺の可愛い奥さんだ！」

「よしよし。そういう君も可愛いよ」

ドラルクが半ば呆れつつ頭を撫でると、ロナルドは大型犬よろしく遅い可愛がってくれた。

「じゃあ、いっぱい可愛がってくれよ！」

「ああ、言われなくとも」

ドラルクは妖艶に微笑む。そしてロナルドのバスローブの裾から赤いネイルの指先を忍ばせ、すっかり形を変えたものをキュッと握った。

「おやおや、もうこんなにして」

そんなことをされては、受動のお色気めつばう弱いロナルドなどひとたまりもない。

「うっ……、じゃ、じゃあお願いします……っ！」

「ウフフ、素直でよろしい」

これが世間ではクールでセクシーなイケオジ退治人と言われる男の実態だ。年齢を重ね、ますます格好よくなったのは事実だが、その中身は愛妻の誘惑にいとまたやすく陥落してしまう可愛い五十歳児なのだった。

「はあ、すごいね君。まだちよつとしか触ってないのに」「しょうがねえだろ。お前が目の前にいるだけで、自然とこうなっちゃうんだよ」

ローブをただけ姿を現したロナルドの砲身は、早くも天を仰いでいた。その先端からはドラルクを欲する証が溢れ出し、彼自身を濡らしている。

改めて両手で包み込むと、ソレはビクリと身を震わせ、いっそう大きく反り返った。

「フフ、相変わらず立派だねえ。私、死んじやうかも」

「う……、そうしないように努力します」

普段はどうあれ、愛し合う最中に砂にするのは極力避けたい。もつともここ数年は長年の努力の甲斐あって完璧な力加減を把握し、通常の営みなら問題なく楽しめるようになっていた。

加えてドラルクの体も若いころに比べればずいぶんと肉付きが良くなり、多少の体力もついてきたので、よほどのことをしなければ大丈夫のはずだ。

けれど、今日のドラルクはどういうわけか、やたらとロナルドの劣情を煽るようなことを言う。

「でもね、たまには遠慮しないで、君の考えていること全部してもいいんだよ？」

「全部？ いや、さすがに全部は無理だと思うぜ」

うっかり口を滑らせると、ドラルクは目を輝かせて話に乗ってきた。

「え？ 無理っていったいどんなすごいこと考えてたの？ 気になるなあ」

「まあ……、それはいいだろ。ともかく、お前を死なせないように頑張るから」

ロナルドはそう言うのと、ドラルクの体を背後からヒョイト持ち上げ、自らの膝に乗せた。

「まずはいっぱい触らせてくれよ」

「あつ？ んんっ、ロナルドくん……！」

ロナルドの大きな手のひらがドラルクの着衣を取り去り、その胸を揉みしだく。

「ああ、最高……。お前のおっぱい、好き……」

決して大きくはない、むしろ平均よりもささやかな胸だ。なのに、ロナルドにとってはいたく欲望を刺激されるらしく、背中に当たる熱がまた硬度を増した。

同時に口づけが降ってくる。頬に、うなじに、肩に。さらにシーツに横たえられ、鎖骨や胸へと。

そのまま胸の頂きを熱い唇で覆われ、舌先で熱心に愛撫されれば、ドラルクも思わず甘い悲鳴を上げた。

「ああん、ロナルドくん、それ、いい……」

「そうか。じゃあ、もつと気持ちよくなろうぜ」

ロナルドは、ドラルクの脚の間に手を伸ばした。

そして、しとどに濡れた秘裂を割ると、その蜜を指に纏わせゆるりと上下させる。

一見無骨な手は、ささくれの一つも無くよく手入れされている。それもこれも、ドラルクを傷つけないために日々作り上げられたもの。そんな手が敏感な場所を滑るのだから、気持ち良くないわけがない。

「あ、あつ、あ、そこダメ……！」

指がひととき敏感な突起をとらえ、ドラルクは顎をのけぞらせ、体を震わせた。胸を吸われながら、そこも一度に愛撫されては、さすがに刺激が強すぎる。

するとロナルドは体をずらし、ドラルクの細い脚を割り開いた。そして先ほどまで指を這わせていた秘核に舌を当て、ちゅ、ちゅ、とごく弱い力で吸い上げる。

「あつ、それ、すぐイク、イッちゃうからだめ……！」

「ん、いいぜ、イケよ」

「嫌だよ、私だってロナルド君のこと気持ちよくしたいの……！」

「うッ……、わ、わかったぜ」

ロナルドは後ろ髪を引かれる思いでそこから顔を上げた。正直を言えばまだドラルクを指や舌でじつくり堪能していた。だが、そんなに可愛いお願いをされては従わないわけにはいかなかった。

「じゃあ、次は私にさせてね」

「いいのか？」

「うん。そこに座って」

言われるまま、ロナルドはベッドに膝を立てて座る。

その足のはぎまに身を横たえたドラルクは、乱れた髪をかき上げると、何のためらいもなく目の前にそそり立つロナルドの雄を口に含んだ。

「う、あ……ッ！ ドラルク……！」

ドラルクの巧みな舌技がロナルドを翻弄する。

年々巧みになるその技に、ロナルドは眉を寄せて喘ぎ、シートを掴む指先が白くなった。久々に愛し合うことも手伝って、ほどなく限界が近づく。

「ぐッ……！ ドラルク、もう出ちまう……！」

「いいよ。どこに出したい？」

「えっ!? バカお前、そんなエッチな……！」

「ほら、教えて？」

ちゅぽん、と口を離し、ドラルクはロナルドを見上げた。その慈愛に満ちた表情に、ロナルドの心の中の五歳児が顔を出し、思わず素直な言葉がこぼれる。

「うっ、うう……、お前のナカがいい……」

「そう。で、ナカってどっちの？」

「どっち、って……？」

快楽で霞んだ頭でフワフワと問い返す。しかし、次のドラルクのセリフは一瞬でロナルドの目を覚ました。

「お尻でしてみたいんでしょ? ロナルド君♡」

「えっ……、ええっ!? ちよっ、俺何か言ったっけ!?」

慌てふためくロナルド。秘密にしていたはずなのに、どうしてそれをドラルクが知っているのだろう。まさか寝言で言ったとか?

「うーん、言っているはないけど。君最近、アナルセックスの動画ばっかり見てるよね?」

「ヴァッ!? な、なんでそれを……!」

「ほら君、時々パソコンつけっぱなしで寝てるだろう? 毛布を掛けに行ったらまたま見えちゃったんだよねえ。なんだっけ、彼女とアナルセックスする方法だっけ?」

「ヴォアアア!! いや、それちよっと、ほんのちよっと興味があっただけだから! それだけだから!!」

別にアブノーマルなブレイがしたいわけじゃない。普段のセックスに何の不満もない。むしろ感謝しかない。

ただ、以前からなんとなく、ドラルクのお尻に自分のモノが入っていると想像すると妙な高揚感を覚えた。

いつかはしてみたいと思いがながらも、実際にはさすがに無理だと諦めていた。いたのだから。

「実は私も興味が湧いちゃったんだよねえ」

「バカ、そんなこと言われたらちよっとやってみたくなんだろうが! いやしないけど! すみません!!」

「だからいいって言ってるでしょ。何事も試してみなくちゃわからないんだから」

「うう、でも俺、お前に無理させないってジョンとも約束したのに……」

「まあ、それはフラグだったということだ」

「そんなこと言うなよお」

半泣きのロナルドに、ドラルクはさらなる追い打ちをかける。

「それに、こっちはもう準備しちやってるんだけど」

「え? 準備って……?」

「ほら、その、色々と。君のがちゃんと入るようにさ」

そこでドラルクが先ほどのアダルトグッズの購入と、一緒に入浴しなかった理由を暴露すると、ロナルドは目を見開いてフリーズしてしまった。

「おや？ さすがに引いちゃったかな？ おーい、ロナルド君？」

「……とう……ございます……」

「え？ なに？」

「ありがとうございます！ 俺のためにそんな、そんなエッチなことまで……!!」

「ウフフ、じゃあしてみようか。この年にして初体験なんてワクワクするよね！」

「お、俺も、俺も初めてだから、ちゃんとできるかわかんねえけど……!!」

「うん。二人で気持ちよくなろうね♡」

「うあ……！ は、入った……!」

「すごい……、本当にぜんぶ入っちゃったあ……♡」

時間をかけて二人は一つにつながった。すべてを収めるまでに、あまりの刺激に我慢できなかったロナルドが二度ほど熱を放ってしまった。ドラルクも度々死にかけてはしたものの、初めて開かれたそこは、新鮮な、しかしどこか懐かしい劣情を二人の間に呼び覚ました。

「あんっ、しゅごいっ♡おしり、気持ちいい♡もつと、もつとしてっ♡♡」

「んっ……、こう、か？」

「あつ、それ、それ好き♡♡」

「ああ、堪んねえ……。可愛いぜ、ドラルク」

「あんっ、でも、淑女がおしりでイクなんてえ……!!」

「いいじゃねーか。淑女のお前が俺の前でだけ、こんな姿見せてくれんだろ？ 最高だぜ」

長年連れ添った伴侶が、初めての快楽にうつとりと溺れる様子は胸をかきむしりたくなるほど愛しい。

ロナルドはさらにグッと腰を押し込む。

「ほら、もうイっちゃまえ。俺も、またイク……!!」

「あつ、あー……!! イく、ひでおくんっ、私、わたし、おひりでイっちゃうよお!!」

めったに呼ばぬ名を呼びながら、ドラルクはいつもより力強いロナルドの腕の中で果てた。

「大丈夫か、ドラルク。結局無理させちゃったな」

「平気だよ。それに、たまにはいいじゃない。優しい君も好きだけど、また二人でいろんなことしようよ。ね？」

「うう、ドラルク、好きだ、愛してる……!!」

かくして、この日の体験は二人の新たな扉を開いた。帰宅した後、ドラルクの憔悴ぶりに驚いたジョンから散々怒られたのはさておき、夫婦の愛はますます深まり、シンヨコの街は今日も平和に保たれている。

End.

おつきあい頂きありがとうございました
もう欲望しかない本ですが
楽しんでいただければ幸いです！

素敵な小説をくださったnanaさん
単行本作業中なのに一枚描いてくれたともつか
ありがとう

彩色、デザイン、諸々なにもかもお手伝いしてくれた絢さん
トーンとかめっちゃ手伝ってくれた慎ちゃん
めっちゃありがとう

そして読んでくださったみなさまに
感謝を込めて！

2025. spring
10月4日 = 

hahaさんか
つメソト頂戴したー!!
ありがとう ございました
おかげでhahaさん
書き止めてあげて
...!!

このたびは「年下のオトコノコ」
ご発行おめでとうございます！！
素敵なご本にお呼びいただき嬉しい反面、
ものすごく恐縮です。お話をいただいたときは
「やったー！！」と小躍りしたのですが
、あれもこれもと夢を詰め込んだ結果、
お目汚し以外の何ものでもないものを送りつけてしまいすみません
反省です……。
ともあれ、執筆期間、30年後のロナドラ(♀)ちゃんたちの生活を
存分に妄想できて幸せと元気をたくさんいただきました。
ありがとうございました！

発行日2025年5月3日
FourLeavesClover／四葉ゆいこ
X : yuiko_clover
yuiko_clover@gmail.com

印刷：株式会社サングループ

この本は個人の趣味の創作物であり
原作関係者様との関係は一切ございません
ネットオークション・フリマへの出品
無断転載アップロードを全て禁止します

94unofficial fanbook
presented by
FourLeavesClover

**TOSHISHITANO
OTOKONOKO**

ロナルド × ドラルク♀

The background is a vibrant pink. A thick green ribbon with a white inner border curves from the top left towards the bottom left. Scattered across the background are various white and green line-art motifs, including hearts, loops, and swirls. Some motifs are double-lined, while others are single-lined.

94unofficial fanbook
presented by
FourLeavesClover

**TOSHISHITANO
OTOKONOKO**

ロナルド × ドラルク♀